女日用染物の傳

全

原田繊維文庫
文庫4
978

番號	23
科別	染織関係
編著者	
書名	女日用染物の傳
發行所	

（原田文庫）

昭和三十年十月二十九日
第一商学部より移管

文庫ヰ
975

早稲田大学
圖書館藏書

文庫4
978

原田繼經文庫

秘傳

志み抜染抱法 上

東都

第十四　そのおさへ紙作

▲小麦は紙のつれたるよりは五六年に紙を食へて
よくつゝかれさるなり　紙の作るゝ所を
ゝくしてよろしかるべし　又ものけ紙をもつて
ふるのけ紙をもつて　ふるのけ紙を粉にして
うづきぬりつるもよろしかるべし　たびも
▲紙は紙の作りかたを粉にしていと
あつきもの不あつき是分かゝ変てうへは紙一
重一重紙の作るを重くうへは又紙を
一枚一枚ものりけの粉を共分をたるのるわゝ

つゝれおもしを一度ならけ変べ有るうりもべて他を
その年おちとせばりかゝるもちひきしくれば
紙へおちてもやこうのとるあるよあるつくものゝ
又本庁をこまうにふるひ物く巣の間はあつく
おれ年こうへは紙の作る紙を行ふるもの至又
その中に庁紙へ巣の間へ今るかゝるのもをして
紙をゝおもてゝくつよくおけばあるを
▲巣に紙の作るは石灰をふるひうけ紙おも
しにかけ変べくおるるすべて変あるあれ石灰を
かけくあけを紙へぬけるあれ

又米ゆ汁の付てる時めしそくひとあつくやうて
紙をたりおれ一夜して汁ぬるるなり
▲雲の付てる人數げんの せんじ汁又米酢を花
たるいぐきてすくおしひても落るまりもべてあひ
その後小麻ゴ紙三だんとるべしとくむしかい
つつ又さらに紙へ
まるるくにたのとたぬしてうれさ乃
なるこのくおひきるるらを
▲ちぶのつたるるとうちんをせんじあらぶし
又四つ石ぶーとせんじあらふ又麻のあくあて

ちらあるよし ▲ちもちの付てるハごちもちのぬめり
ほくあらふべー ▲おてこ病のつたるハ米酢をせんじ
あらふべー ▲無乃つたるを生姜とすりあぎ上
ぬおけで血をとるくあるまり去るきをのよ付る
ひとうちん紙つぎ元ほくぬらしまるべー ▲うを
ちの血付るしく汁のつたるハかぶのけるまく
あらふべー ▲白魚のちのよ血をまるハ米ゐどの
はきたるいわし紙をこくもりつけわらへだお
つるるり ▲ちこーのつたるハ汁すてあらへおと
その汁をねくべー 又みそけまくあらふもはし

秘傳 志み抜染指南 中

東都

▲抜染のものの色おしたるものを抜染よりあるを
入れいろいろ又あるものをといきたるてもあり染のあるを
入れ黄きべにをいろいろ染るものあり▲染ぞめのあるを
抜くに抜いの法に水を入れ抜くべきものあり
▲紅染藍染乃ものにあるものあり抜くものあり
ゆるくもとくべしそれ外にあるものあり
あるものは手ぬぐいにあるものあり
ぬるくもゆるくもとくべしあるものは
ぬるくゆるくもとくべし

又茶のかきべにあるものは▲白紙をもて
ま〻に紙をかくるいろいろ紙を
ぬりしのきたるものは染つけをしたくべし
うつもきくあるあり抜くべしくれくれ
▲きべにをいろいろなどのけ方をするに抜のあるを
あるくもれば抜けのあるきにはしてをれ入れ
ぬきれあるよりおけば抜ぬくるくれ
あるくもべしあるあるぬきべにをあるひてあ
紅のぬけるきくるくれ抜染作あるあるぬき
をれぬれ方紙しき

▲たゞこのゆふの湯をうるかぶとうをせんぐわらふ
べーゑ湯屋をけまくたらうまもよ
▲あとゝ六郎のそも酒のくりたるをとう婆の湯で注ふ
べー▲白紙をのゆふ家のちゝまるいりのとうもそて
わくゝべー▲小袖のわくゝ無白紙と移ふ
してきあるゆひにうけ水をとゝまそうゆうをさ
ぼー三文をだしくそこのひとりゝるゆをはふゝ手
て来てふくなぐわるきのあの内へのきあくべーゝ又きを
ぐれとちゝまもの〳〵西へもとりけくわくべうゝ
▲編の移りあり

▲きあ一文にうをのまくれあくゝ二文たきそあくまれ
だふくゝ口くゝたそこきねをへ移りべーきねのそ
しゝ然やきくそまりわくる時のまぐそあ比る
ぐしわくれぬはゆるたりゝ大くをあびのたくそ
あきくそくるまいくまるくべりたりゝ▲紙ハ
米酒ゝまく移りべねくゝ消と迫▲とゞ系
移りぐりふねりやまへのきねのでくねくべー
▲あとそのこらく拾ゆむゝとりて麻のぼ
とくうへのくをこそげ名ゆあくゝ伝あるひ
たゝくえあげてこねくとりけてあきのでくひねる

深めの秘伝

▲こびるをもくのはめくに二ぶんそのまそうへを
もくのちうあだしめまに二合めうだんかーいを
そめる▲その茶へめくめうあくに二人をめくめ皮
にだーうめうだん合くそる▲めえぎをなを
茶にまくそめしくのうのまくに二ぶんを先
まそうへうをまをよめうだんへてそる▲そう
だん茶へなめのちうあてこべんそめとあくへのちよん
戻めうだん入をあそとにうちうふだーう称
めへくそる▲うどひと茶へおのちうふあをを

こまぜぬのりかーへ一ぶんそのうかあをまくに二ぶん係
をうくへめうどんを水よりさたくそもてはし▲あぢ
茶へまるようにこしやちあきのあくう称かーまぜ
二ぶんそる合をくけそふいーあまおの汁を
こをぬのりかーへ合へ二ぶんそる▲黄茶なを
ちうあを一へんそめとうへもうへめうどんをに
へる▲あわをうを茶のうだあの花をーをな
そあへまくかをけーうあて二へんそうへをくか
ワよこをうだんかーだーうぬかーへてそるうの
▲めでぬをそを揚めて二べんそる中ぢあへちぶを一

[illegible]を水まろ[illegible]さて濃てよ〜
▲本家系かめくろ[illegible]へんそわさわ[illegible]
しぐ[illegible]ぐんぶし[illegible]いれ[illegible]ろ▲[illegible]
[illegible]ぐしぬへ[illegible]ぞわ[illegible]
のせル[illegible]ぐんや〜[illegible]ろ▲ひ[illegible]
[illegible]ろ[illegible]
のとめ[illegible]ぐんや〜水[illegible]
▲とび[illegible]へんを水[illegible]
二三へんそ[illegible]

▲[illegible]を[illegible]中液[illegible]
[illegible]
女〜人一[illegible]
[illegible]
そ[illegible]
そ[illegible]
▲[illegible]
[illegible]
▲[illegible]

まくそあるなり▲食らん又ハあつきもの多んのす
きぬくはをたいしたる板のうへにひろげてあし
てそのうへよりあつき紙をきれいにひろくかさ
さねつけての上の灰のうへ米をかけあてさて其の
紙のうへよりかみしめつけてつけまゝそろへく
むしろへたゝきながらすんへんもかくとうけ
此所あるときハよすゝハかへんたつをあつれにあまなは
ちけるを太のほどくほして紙を九枚ぞすぐなは
わをそうり▲桜丸(つゆ)のうちきうるものかびひてるへ
むめの事のあつるをとちんだあらんへハあつるなり

あふらきぬのはしろくしてのきれにてそろへく
のごえたおつるなり▲小袖白むくなどのあかを
しみうハあづき粉極よくきぬかうへしよくふ
るひろよわぐそうハ水を手ぬぐい二三度絞太のど
こよしくそこふかてつるを日よありてあめのあらふ
ときあつめの中へ一字入合てきるあめのをはらふ
べし▲あかぞめのるん衍水も紙ゐあぐへ半の
紙だけをぬくのまハまづ極上のせうちうにて
衣ぞうちをねり大こんを紙の丸かどにはまうく
切てその切口へねすてる衣ぞいをぬりふる

おりてこうようくれきこと一様かけをぬけるこ
▲ものどく文字ものどく紙ぬくまへろうそく紙
たんたんたんたこと紙四方ぬれぬくぬりて
それを業にそなうこともかれてうのきたる府
あらそわるべ四くぬけるそのこ▲文あり紙の
うりたるをぬくかをたて形すしてぬりたる
あるこひとをたて形すしてぬくぬけるこ▲光
おりて一様をけば紙をもくぬくにい不通のうきの切は
そんどたる文字をぬくにい不通のうきの切は
水をつけるこ字の上ものだ水ろうき

たるべ又右のごとく二三度ぬれば長きこと本ますい
ろうてぬけるこ文法まんけべ一度ぬるとろ
そうしさう去らうぶんぶこ一本三尺細水ま
してあをのきそんどたる文字の上へそそぐて
右の粉をふりかけあるたるべたるひを
すべしこれ出てへ和ときこ文字ものそもぬけるこ
▲あんどうの紙をうしてとあるぬ紙用の法へまづうふけ
をようくをうしてとあるぬ紙用の法へまづうふけ
入こその上へすべ紙をあく切くかぶせその
うへうの紙をつれるこうしんまてたをと

ものすべしこれ[illegible]んをどうれときこれ紙へりて大今
そんするものゝ▲竹ふをもようを薄さ三分ばかりしを
四十匁ろくぢん三十匁たんぢん三十匁衣庆匁
衣の汁味を細糸にして[illegible]れをおすとそれるふ
にそる所よりをゝ[illegible]をうれてからきたるとれよ
わるひおもをべかれさるそのされんようを
見る秘伝

おもを接深をの伝法術

早稲田大学図書館
011488489129